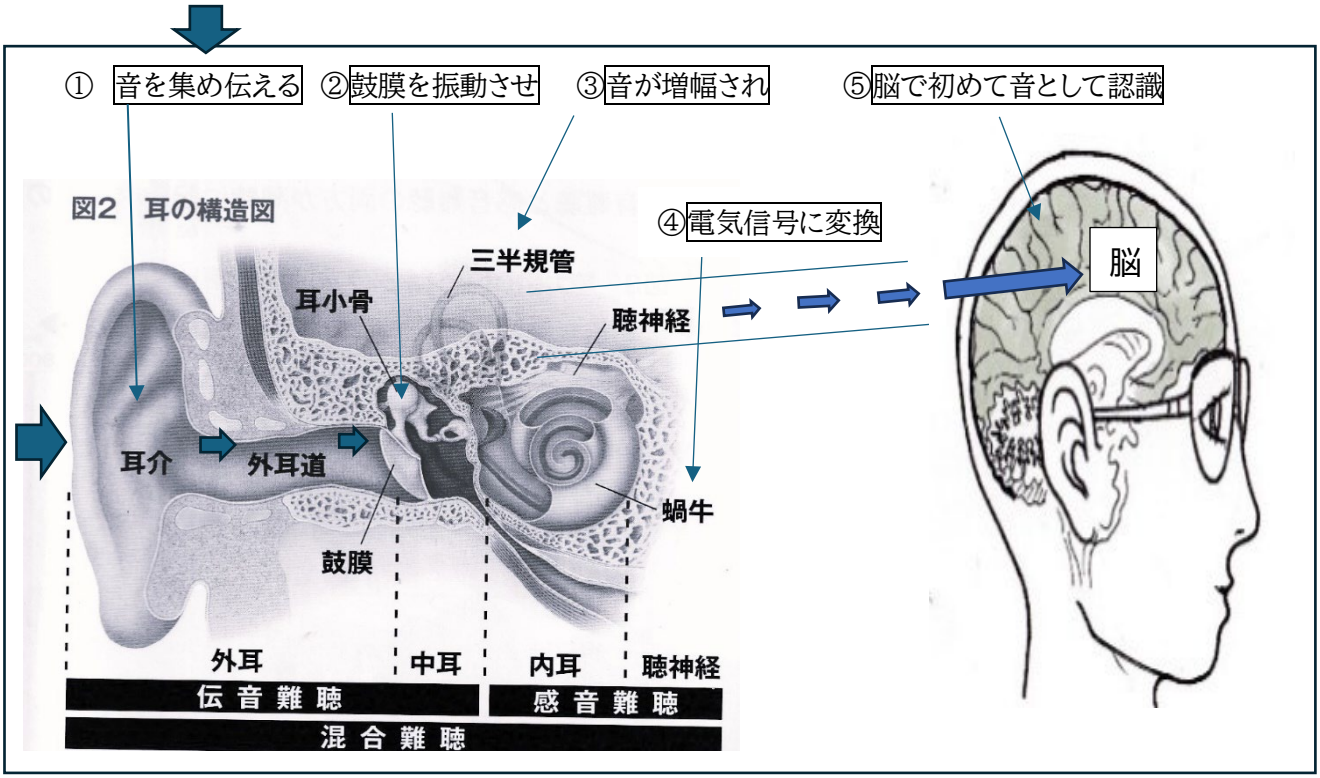
1.聞こえのしくみ

①耳の構造は３つ部分　「外耳」「中耳」「内耳」から成り立っています

②聞こえのしくみ　①➡②➡③➡④➡⑤脳に伝わり、初めて音として認識する



2.難聴とは

○難聴とは音が耳にはいってから脳につたわるまでのどこかで障害が起こり、音が聞こえにくい、音が聞き取りにくい、あるいは全く聞こえないといった症状のことをいいます。

○難聴には障害の部位により三つの種類があります。

①伝音難聴　外耳と中耳の障害によって音がうまく伝わりにくくなる

②感音難聴　内耳から脳までの間で障害があり、音がうまく感じ取れない

③混合難聴　伝音難聴と感音難聴が同時に起こるタイプの難聴

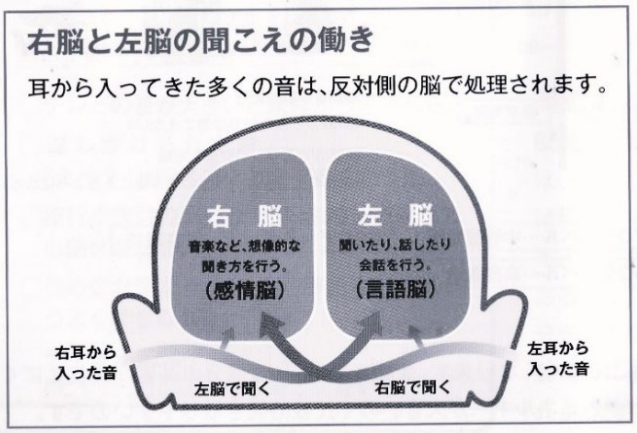
補聴器とメガネの違い

○メガネは購入してすぐに使える

○補聴器は慣れるまで
　３か月程度脳のトレーニング・訓練が必要

○音の情報が少ない状態に慣れてしまった脳に補聴器が音を送るとうるさい！初めは苦痛。

○環境音や雑音になれる補聴器リハビリが必要



※ 補聴器は買って終わりではなく、定期的にメンテナンスや調整が必要不可欠！

3.加齢性難聴とは

○聴力は、30代より徐々に衰えがみられるようになります。

【加齢性難聴の原因と症状】

○内耳の音を拾う機能である蝸牛の老化に起因する

○特に高い音から聞き取りにくくなります

○小さな音が聞こえにくいだけではなく、音がゆがんだり響いたりして、うまく聞こえなくなります

○症状は少しずつ進行していきます

○加齢性難聴は自分では気づきにくい

たかな(高菜)↔さかな(魚)　　しちじ(7時)↔いちじ(1時)

加齢性難聴の治療選択

聴覚の程度	聴力レベル	きこえの状況
正常	25 dB未満	小さな声やささやき声も聞こえる
軽度難聴	25～40 dB未満	小さい声や騒音下での会話が聞きづらい聞き間違いや聞き返しをすることが多い
中等度難聴	40～70 dB未満	普通の大きさの声の会話が聞きづらい
高度難聴	70～90 dB未満	普通の大きさの声の会話が聞き取れない
重度難聴	90 dB以上	耳元で話されても聞き取れない

補聴器

人工内耳

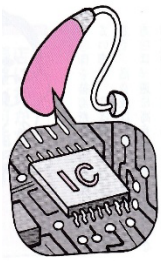
（日本聴覚医学会の資料をもとに作成）

❶ 補聴器の装用

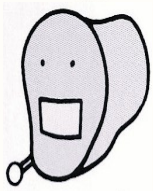
❷ 人工内耳の装用

※人工内耳手術は1994(H6)4月より健康保険適用

4.補聴器の種類

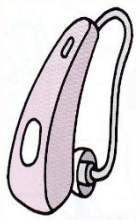


耳の中に入れる　**耳あな型**



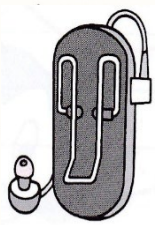
耳の穴に差し込んで使用します。自分の耳の穴の形に合わせてオーダーメイドでつくるため、ぴったり収まって外れにくく、マスクやメガネの邪魔になりません。また、補聴器のマイクが耳の穴の入口にあるため、自然に近い音をとらえることができます。

耳の後ろにかける　**耳かけ型**



耳の後ろにかけて使うタイプ。小型タイプから重度難聴者向けのハイパワータイプまで種類やカラーも豊富。操作性が良いため、補聴器を使い始めたばかりの方でも比較的簡単に使いこなすことができます。

イヤホンで聞く　**ポケット型**



本体をポケットに入れ、コードでつながったイヤホンを耳に差し込んで使用します。手元で本体を見ながら操作できるのが大きな特徴のひとつ。また、高出力が得られる機種もあり、重度・高度難聴にも対応しています。